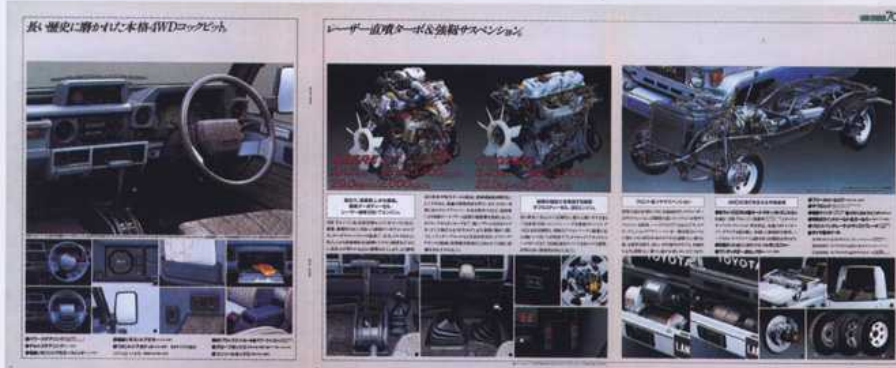


3B型を積んだ70/73

昭和59年にヨナマルからハトタッチした際、ナナマルに直噴ターボ・モデルはラインナップされていなかった。当初のカタログには、ヨナマル最終型(BJ42/46)と同じ3Bディーゼルエンジンを積んだBJ70(ショート)とBJ73(ミドル)の2車種が載っていた。ボディタイプはBJ70がハードトップと機仕様、BJ73はFRPトップ。1年後に直噴ターボ搭載のBJ71/74が登場すると、BJ71/74の「LX」に対し(BJ70/73にも「LX」(右写真)はあったが)、「STD」主軸のベースグレードとして定着していくことになる。



BJ71/74には直噴ターボのほか4速A/Tも採用

ヨナマルと同じ3B型を積んだナナマルの登場は、ランクルファンを少なからず落胆させたが、1年後に追加された直噴ターボ・モデルでナナマル人気は上昇傾向に。4速A/TはBJ71/74にのみ設定された。カタログでは直噴ディーゼルとA/Tの搭載を強調する構成。



3B型搭載モデルは「STD」

BJ70/73には外観・装備をBJ71/74と同等とした「LX」のほかに、グリルとバンパーがブラック塗装の「STD」もあった。シンプルで廉価。

緑と白と赤、色の組み合わせが妙に絵になる。赤は紫外線を吸収しやすく褪せるのが早いはずだが、色の深みとツヤはまだまだ新車に近い。白、FRPトップは水垢でくすみやすいのに、太陽の光を眩しく跳ね返している。グリルやバンパーのメッキにはくもりがない。走行距離が15万キロに達していても、なおディーゼル・コンディションがこんなにもいいのは、高原で暮らしているせいだろうか？

長野県諏訪郡富士見町。八ヶ岳の裾野、標高およそ1000mの高地に広がる富士見高原は、我々が取材でしばしば訪れるところ。そこで、あるとき美しいBJ74Vを見つけた。緑が濃い土地だから、赤いボディカラーがやけに目立つ。斜め格子のフロントグリルには誇らしげに「TURBO」の文字。それは、白いベンシヨンの前で白樺に寄り添うようにたたずんでいた。

**15年で15万キロを走った
色あせない赤が映える**

長野県諏訪郡富士見町。八ヶ岳の裾野、標高およそ1000mの高地に広がる富士見高原は、我々が取材でしばしば訪れるところ。そこで、あるとき美しいBJ74Vを見つけた。緑が濃い土地だから、赤いボディカラーがやけに目立つ。斜め格子のフロントグリルには誇らしげに「TURBO」の文字。それは、白いベンシヨンの前で白樺に寄り添うようにたたずんでいた。

はなような気がする。大トルクでの勝負はハチマルに任せておけばよかったのではないか？ ナナマルはクロスカウンターマシンとしての機動力、コンパクトで軽いことによる取り回しの容易さを備えていれればいいと思う。ゼイタクを言えば、小さな4気筒エンジンでもパワーがあればなおのこと良い。BJ時代のナナマルにはそれが備わっていた。ナナマルを買うなら、BJ74がいい。新しいナナマルに乗れば乗るほど、そんな気になつてきていた。



20世紀の偉大な4x4たち

The Epoch-Making